

2021年12月8日

12月1日(水)の授業中の実習を参考に、自分が録音した音データを離散 Fourier 変換して、含まれている周波数成分を分析せよ。

- Oh-o! Meiji のレポート・システムで提出すること。
- 比較のために、コンピューター等の機器で発生させた音データも調べる、というのは構わないが、自分が録音した音データを少なくとも1つ調べること。
(楽器であれば、生の楽器の音を調べる。)
- 基本周波数以外 (いわゆる倍音のようなもの) もいくつか調べること。
- (基準が難しいが) あまり複雑な音にしないことを勧める。長さも1データあたり数秒程度に止めること。
- 講義では Mathematica でコマンドを1つ1つ入力して分析したが、プログラムを書いても良いし(その場合はプログラムそのものと、その使い方もレポートに含めること)、それ以外のプログラミング言語を使っても構わない。
- 音の高さを音階で表現するとどうなるかも書くこと。
- 音データを作成した方法(録音した方法、フォーマット変換した場合はその方法)を説明すること。
- 可能であれば音データも一緒に提出すること。

Mac で (例えば) QuickTime Player を使って録音する方法は、「QuickTime Player での録音」¹ に書いておいた。それよりは、スマホのアプリや、IC レコーダーを使う方が実際的と思われる。その場合は、何をどのように使って、どういうフォーマットで録音したか説明すること。

Mathematica にインポートできる音声ファイルのフォーマットは少ない。WAVE フォーマットで録音出来ない場合も、例えばターミナルで `ffmpeg -i mysound.m4a mysound.wav` のようにして、WAVE フォーマットに変換してからインポート出来るかもしれない。「QuickTime Player での録音」では、Apple 純正の `afconvert` という変換ツールを紹介しておいた。

Mathematica 以外を用いて、プログラムを書く場合、(1) WAVE ファイルを読む、(2) 離散 Fourier 変換、の2つが必要になる。それが可能であるか見極める必要がある。これについては気軽に質問して下さい。

質問用の Zoom オフィスアワー (12/14, 12/21, 1/11 の 12:00–13:00) を用意してありますが、もちろんメールでの質問 (katurada あっとマーク meiji ドット ac どっと jp) も受け付けます。

¹<http://nalab.mind.meiji.ac.jp/~mk/labo/text/memo-sound/node40.html>